

<救う神あり>

好きな形をあれこれ考えるのは楽しい。最近手の甲にかかる指輪なる2点を考案、制作。指は長く見えてスマートだし何より楽しいリング！とひとり興奮。やがて製品となり姿を現す。“やっぱり良い、良い”と勝手に喜び、ふと思う。でも、一体こんな指輪、誰が買うの、となる。シマダの作品はその集積のようなもの。恥ずかしいのと不安とで誰にも見せる勇気が出ない。やがて隠し続けるのもこの子に可哀想と勇気を持って展示する。“なに？この変な指輪”という声。やっぱりヘンなんだと背を縮める。“えっ？これ、先生のお宝なの？買ってはいけないの？”更に“何て楽しいの、この子達”。まさに神の声。一旦は己の幼稚さを恥じ、落ち込むも、この神の声でズにのり一時の反省も忘れ、そして喜々として次を考える。時折自らを滑稽に思えて笑えるときもある。が、この思考回路は病なのか、反省も虚しく繰り返す。根底にはお金の価値と人の価値は別、上質、かつ品があり更に楽しいものを創りたいという気持ちがある。そして考えるのが好きということ。



R-0440
アクアマリン
K18WG



R-0441
ブルーカルセドニー
ロードクロサイト
ダイア0.028ct
K18WG

手の甲にのびる指輪

石は指つけ根から小指方向に向かって斜めにのびる
思わずカオがほころび楽しくなる

<足るを知る>

この項目にする言葉。老後破産・下流老人・孤独死。不安をあおりたてる表現に惑わされ心配する人も多いのではないか。死の瞬間人々に囲まれるのは幸せなのか。お金は使えば少なくなる。少なくなったなりの生活は惨めなのか。足るを知る者は富む、という言葉もある。それに人は歳と共にあれもこれもと欲しくなくなる。自分にとって何が大切なのか解ってくるから日々の暮らしの中の小さな喜びに気付くようになる。陽暮れ時の西の空の刻々変わる展開はこれが天国かと思う程。オレンジや黄金色、やがて荘厳なグレイへと刻々と変化する空に近づこうと歩き続けるのは至福の時になる。見えない先を心配するより今与えられた時を好きなように使う生き方も楽しいものと思う。



<女性にモテないスパイなど会ったことがありません>

と、いうのは手嶋龍一という人。かつてシマダはミステリー三昧だった時期がある。犯人さがしや探偵物ではない。ル・カレなどのイギリスのスパイものが多かったと思う。スパイである彼らは知的でストイックであり強い精神を持ち、かつしなやかである。仕事柄当然のことではあるが、カッコイイのである。スパイはスパイと知られてはならない故の哀切もいっそう魅力を増す。先の手嶋龍一の本に“汝の名はスパイ裏切者 あるいは詐欺師 “というのがある。殆どのスパイは Oxbridge (オックスフォード、ケンブリッジ) 出身、そこでスカウトされM16 (イギリス秘密情報部) メンバーとなり、その多くがやがて作家となっている。この手嶋龍一という人、多才すぎて何やら解らない。しかし著書はどれも面白い。アメリカのハードボイルド作家の R. チャンドラーの著書の中に“しっかりしなかったら生きていけない。優しくなかったら生きている資格がない”と言った探偵屋さんがいた。こんな言葉を言う男性も素敵と思えてしまう。作家の技である。



<船越桂>

遠くを見つめる眼、肩から手が出たり、お腹から腕が飛び出したり、頭から耳とも角とも解らないものが飛び出したりする立像。多数はただ遙か遠くを見るような眼差しの立像が多い。生々しい人間の印象はなくその静かな佇まいから、静謐、瞑想的、時には哲学的とまで感じるのは想像を超える形が出てくるからか。



とにかくシマダはこの人の木彫りが好き。10年以上前、プラハの夜道をコンサート帰りに歩いていた時のこと。照明の少ない暗い道のお店の奥にスポットライトに照らされた船越の小さな像があった。こんな所で会えるなんて、と、店の鉄格子に両手でしがみつくように見入った記憶がある。ちなみにシマダの作品展で使っている手製の胸型 (ネックレスなどをかける台) は“フナコシのエンジェル”と呼ばれる。男性の背中あたりから天使の翼のような羽が見える像がヒントになっている。思えばシマダが行く美術展は平面より立体の方が感動して帰ってくるのが圧倒的に多い。

<国際宝飾展 IJT2018>

2018年1月24日(水)~27日(土)

デザイナー/クラフトマンパビリオンに戻ります。

東2ホール入口より直進、突き当たり左 デザイナーパビリオン



フナコシのエンジェル